外部評価結果総括表

事業所名	内海ホーム気ままま
評価確定日	2007年3月31日
評価機関名	特定非営利活動法人HEART TO HEART

Ⅰ 運営理念

領域	評価項目数	できている項目数	改善が必要な項目数	判断が不能な項目数
運営理念・運営理念の啓発	3	2	1	0

特記事項

原点は自宅で始めた宅老所である。「やすらぎここにあり、気ままな暮らし」という理念を管理者夫婦は大切にし、日頃のケアを通して職員に伝えている。職員もそれぞれに理念を理解して実践につなげている。介護保険制度の法改正について職場全体で理解に努めている。開設して4年目を迎え入居者も重度化しているが、医療との連携をとれるように体制を整え、ターミナルケアにも取り組んでいる。その様子が新聞で紹介されている。新聞の切抜きを玄関に掲示し地域、家族に向けてホームの方針を伝えている。

Ⅱ 生活空間づくり

領域	評価項目数	できている項目数	改善が必要な項目数	判断が不能な項目数
家庭的な生活環境づくり	4	4	0	0
心身の状態に合わせた生活空間づくり	6	5	1	0

特記事項

居室は、昔使っていた仕事道具を部屋に置いている方、たくさんの物があふれているが空気清浄機で清潔に保つようにしている方や仏壇のほかトースターを持ち込み餅を焼いて食べている方など、それぞれの入居者の個性やこれまでの生活を大切にしている。玄関の外側に風よけの一室を設置したり、トイレの3枚引き戸を2枚に連動した戸にする脱衣所に手すりを増やし立ち上がりやすいようにする等の利用者が生活しやすいように工夫をしている。

Ⅲ ケアサービス

領域		評価項目数	できている項目数	改善が必要な項目数	判断が不能な項目数
ケアマネジメント		7	6	1	0
ホーム内でのくらしの支援	介護の基本の実行	7	7	0	0
	日常生活行為の支援	9	9	0	0
	生活支援・ホーム内生活拡充支援	2	2	0	0
	医療・健康支援	7	7	0	0

特記事項

職員は言葉遣いに配慮し視線を合わせる関わりをすることで、柔らかい雰囲気を作っている。茶碗を洗ったり、おやつをはこんだり、入居者がおしぼりを配ったり、テーブルの上を拭いたり、ごみだしを行うなどできそうな事は見守り、また役割を発揮できるよう支援している。入居者は1階のデイサービスに自由に参加でき、デイサービス利用者もまた“きままに”ホームに遊びに来る等エレベーターあるいは階段で自由に行き来している。職員は言葉での制止も身体拘束ととらえ、安全のための見守りを行うが制止はしない。往診や緊急時の対応を24時間対応してもらえる医師のネットワークと契約しており昨年ホームで看取りを行った。入居時に看取りについて説明し、家族の希望とバックアップの体制の中で今後も看取りに取り組んでいきたいとしている。

Ⅳ 運営体制

領域	評価項目数	できている項目数	改善が必要な項目数	判断が不能な項目数
内部の運営体制	11	9	1	0
情報・相談・苦情	2	2	0	0
ホームと家族との交流	3	2	1	0
ホームと地域との交流	5	3	1	1

特記事項

職員がなかなか集まらない現状に苦労しているが「ケアは人」という考えから職員の育成に力を入れている。今年中心となる職員が資格を取得するが法人でバックアップしている。今後も研修会にも積極的に参加を促し、知識と技術両面の成長を期待している。社長は管理者や職員の相談相手となり、困ったときにはすぐ駆けつけている。ボランテイァの積極的な導入、消防訓練により、地元の消防署とも連携がとれている。運営推進会議は始まったばかりで、まだ軌道にはのっていないが、地域の社会資源として認知症の啓発の役割も担ってきた経験をさらに活かしてほしい。家族にホームでの入居者の様子を十分に伝えられない場面もあることを課題としている。家族へ入居者の状態を密に伝えることで信頼を深めさらに良い関係を築いていってほしい。

講評（全体を通して）

管理者の家族の認知症介護の経験から平成12年に自宅で始めた宅老所が原点である。1階に、デイサービス、高齢者支援ホームがある小規模多機能ホーム「気ままの家」の2階にグループホーム「内海ホーム気ままの家」を開設した。地域の人々の必要性に応じて、介護タクシー、ヘルパー事業、居宅支援事業所、ヘルパー養成事業、2つ目のデイサービス併設のグループホームと順次事業を拡大してきた。事業の拡大につれて核となる職員の必要性を感じ、職員の育成に継続して取り組んでいる。自宅での宅老所以来、小規模多機能地域支援の考え方を基本として、地域のニーズに合わせてサービスを展開してきているが、行政の理解が得られず、苦労したこともある。4年目を迎え入居者も重度化してきている。その場合高齢者支援ハウスに入所することも可能であり、料金もグループホームと差がないように設定している。また希望によりホームで最後を迎えたいとする人にも対応できるよう往診、緊急時に対応してもらえる医療グループとの連携を図っている。特徴を出して取り組んでいるが、半島の端と言う地理的な条件もあり、地元の働き手は都市圏を目指し、地元に定着して働く人が少ないため人材の確保に苦労を重ねている。厳しい環境の中では、福祉大学の学生が多く住んでいる利点を活かし人材の確保につなげる努力もしている。